《天球の音階》
17 世紀の天文学者ヨハネス・ケプラーが作曲した『惑星の音楽』に着想を得て制作しました。古代ギリシャ以来、西洋では伝統的に、宇宙が音楽的に調和しているという世界観があり、ケプラーの『惑星の音楽』も、惑星の運動を和音と対応させて作られました。画中の下方にケプラーの『惑星の音楽』の楽譜を描き、画面全体を覆うジラフ・ピアノを背景として、山形に伝わる巫女の風習で使われる数珠とそれを扱う人物像そして遊ぶ幼児の幻影や小さな日本人形などを配置し、この世界の目に見えない存在の連関を表現することを試みました。画面右上の一角獣は、一角獣から逃げる男が竜のいる井戸に落ちるという寓話をもとに作られた中世ヨーロッパのレリーフの一部を引用したものです。この寓話では、死の象徴である一角獣から逃げた男が、竜や蛇のいる井戸に落ちて危機的状況が重なっていく様子が語られています。この寓話をもとに、誰にでも訪れる死を受け入れ、一度きりの人生をより良く生きるための象徴として一角獣を描きました。画中のアーチ状の建築物の奥には、作者自身の故郷の風景が描かれています。

《物見遊山》
地元の山形でフィールドワークを行った際に見た小さな仏像が、空を飛んで旅をしている様子を描きました。背景には私の父が農作業をしている様子が描かれています。タイトルの《物見遊山》はもともと仏教用語で、僧侶が 1 つの山で修行を終えて別の山での修行に移る際に、自然を自由に楽しみながら散策する旅のことを指しました。本作では、人間が日々の労働と旅を繰り返しながら研鑽を積んでいく様子を表現しました。

《極光》
地元の山形でフィールドワークを行った際に見た古い仏像の手を主なモチーフとして、空に巨大な手と神秘的な光の模様が現れた情景を描きました。空の部分には旧約聖書の詩篇から引用した、神に救いを求める言葉が断片的に描かれています。タイトルの《極光》はオーロラを表す言葉で、画中ではオーロラの部分を人工物として描くことにより、救済が持つ人工的なシステムとしての側面を描くことを試みました。

《客船》
母の地元のお寺で使われている照明器具を、空飛ぶ巨大な乗り物に見立てて描きました。画中に描かれた研究所のような場所に空飛ぶ物体が降り立つ情景を描くことで、未知の世界との出会いやまだ見ぬ地への旅を希求する人間の欲求や想像力を表しました。